

(18) “くり返し”こそ学習の基本

反復練習が養う高い能力

鈴木メソッドで世界的に有名な鈴木鎮一先生が、以前「その原理は母国語教育の応用である」とおっしゃっていました。

その母国語教育の応用とは、「母国語の学習が、単に母国語の習得だけでなく、母国語を“習得する能力”をも養っていることにある」ことを指摘しており、具体的には“くり返し”的重要性が指摘されています。そのことについて鈴木先生が「これは大事だから、一万回やって来なさい」ということをいとも無造作におっしゃっていたのが印象的です。

今の教育に欠けているのは、実にこの“くり返し”です。だから、(7)で私はこのことを強調し、「反復練習の伴わない学習など、ほんとは学習とは言えない」と述べたのです。「わかった。もう結構」と言って次へ進むことばかり重んずる現代の教育では、もの知りは作れても、能力の高い人間を作ることは出来ません。

幼稚園の漢字教育に反対する人たちがよく口にする言葉に、「就学前に漢字を学んだ子どもは、小学校へ進んで“そんなことはもう知っている”と言って漢字学習をばかにするからいけない」ということがあります。

しかし「知っていてよく出来るからおもしろくない」と言うような子ども

は、むしろ少数です。そんなことを言う子は概して知能が低く、努力する意欲も乏しい、従って進歩が期待できない子どもです。つまり、「知っているからばかにする」ばかりでなく、「知らなければなおのことやる気をなくしてしまう」子どもです。

子どもというものは、柔軟でかつ強靭な精神を持っていますから、大人と違い、本来“くり返し”を非常に好むものです。同じ話を何べん聞いても、決して飽きることがなく、それどころか、「またお話し」と進んで求めるのが子どもの特性であり、本性です。大人の目からみたら馬鹿らしいことに夢中になって、くり返しくり返し続けている姿を御覧になったことがきっとあるはずです。

世界的に著名な数学者である広中平祐先生が文化勲章を受賞された時のテレビのインタビューで、「先生は小学生の頃から算数が得意だったそうですが、そんなにお出来になったのでは、学校の勉強がさぞ退屈だったのでは……」と質問されると、言下に「とんでもない」と否定され、「出来るから最も楽しかった」とおっしゃいました。

「能力を養う」のは“くり返し”であり、それ以外に方法はありません。この“くり返し”が喜んで出来るのが幼少期の子どもです。子どもはだれでも“くり返し”が好きなのです。ところがそれを見て大人がばかにするものだから、子どももそれをばかにするようになるのです。大人が、それを見て「偉い」と言ってほめてやつたら、決してばかにする子どもにはなりません。